

## 「理科サークルの試み(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

最初に、3年生「ものの重さ」の単元で、理科サークルを試みた。写真は、単元の導入で「重さって何だろう」という、教師からの問いに対し、子どもたちが対話をしている場面である。この時は、問いに対する対話に集中させようと思い、中心の観察・実験道具のワゴンは、まだ置いていない。



### 理科サークルの利点

何度かの授業で、理科サークルという授業形態を試してみた結果、利点と問題点がわかってきた。

#### ①サークルの利点も生かせる

理科サークルの良さと、研究所での活動の、それぞれの良さが生かせるということだ。

#### ②顔が見えること

互いの顔がよく見えて、日ごろのサークル対話と同じように、対話が活発になるということである。驚いたことに、日ごろ理科の授業ではほとんど発言しない子どもも、自然と対話に参加する姿が見られた。授業後に聞いてみると「何か話しやすい気がした」と話していた。

#### ③自分の机がある安心感

サークルベンチとちがって、目の前に自分の机があるので、ノートをとったり、観察実験がしやすい。自分の机がある「安心感」もあるだろう。

#### ④研究所(グループ)にしやすい

前の二人が振り返れば(或いは椅子を回転させれば)、すぐに研究所(ファミリー)活動に入れる。

⑤サークルの中が広いので、3年生にとっては活動がしやすい。(下写真)



### 理科サークルの問題点

①板書がしづらい。しても、黒板に一番近い研究所(ファミリー)が見づらい。



②ノートに集中してしまうと、対話が停滞してしまうことがある。また、自分の机の中のもので、気が散ってしまう子どもがいる。

③同じ研究所(班)の後ろの子どもが発言すると、顔が見えず、振り向く必要がある。



④教師の立ち位置が定まらない。ただし、周囲からの声掛けは容易である。